HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ゲルマン語の歴史と構造（1）：歴史言語学と比較方法
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 131, 1（左）-40（左）
Issue Date	2010-07-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/43276
Type	bulletin (article)
File Information	SHIMIZU.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 131 (2010)

ゲルマン語の歴史と構造 (1)
── 歴史言語学と比較方法 ──

清　水　　誠

Structure and Development of the Germanic Languages (1)
── Historical Linguistics and Comparative Method ──

(*The Annual Report on Cultural Science* No. 131. Graduate School of Letters, Hokkaido University. Sapporo/Japan. 2010. ISSN1346-0277)

SHIMIZU, Makoto
(mshimizu@lit.let.hokudai.ac.jp)

Ⅰ．はじめに

本稿はゲルマン語概説として筆者が計画している予備的論考の一部である。これまでに日本で刊行されたゲルマン語の解説書はきわめて乏しく，浜崎 (1976)，河崎 (2006) にとどまる。前者は内容的に浅く，後者は題名に反して北ゲルマン語を扱っていない。ほかにもヴァルテール (平野 訳 2006：342-502) などの一般書の翻訳を含めて，ゲルマン語の概観を含むものはあるが，ここでは割愛する。

一方，海外の関連文献としては，この 20 年ほどの間に Robinson (1992)，König/Van der Auwera (eds.) (1994)，Семенюк/Калыгин/Романова (ред.) (2000)，Ringe (2006)，Speyer (2007)，Harbert (2007) などのすぐれた著書が現れている。Robinson (1992) は古語だけを扱ったものだが，個々の古語を順次取り上げてテキストの分析と解説を施し，教育的配慮と学問的要請

の両方に応えた名著である。König/Van der Auwera (eds.)（1994）は共著で，扱う言語ごとに著者が異なるが，現代言語学の成果を取り入れたモダンな内容であり，古語と現代語を合わせた個別言語的な総覧として最も優れている。Семенюк/Калыгин/Романова (ред.) (2000) も同様の構成を取っているが，現代語としてはペンシルヴェニアドイツ語とクレオール諸語を欠く代わりに，ルクセンブルク語とスイスドイツ語の記述を含んでいる。Speyer (2007) と Ringe (2006) はもっぱらゲルマン語歴史比較言語学を扱っている。前者はドイツ語圏の著者による類書としては例外的といえるほど要領よくまとまっており，ゲルマン語歴史比較言語学を読者に親しみやすいものに変えた労作である。後者はきわめて高度な内容を誇り，学問的伝統を受け継いだ正統的で重厚な学術書である。Harbert (2007) は統語論を中心に類型論的視点を取り入れて，共時的に論じた画期的な意欲作といえる[1]。以上のほかにも，著書の一部として Jasanoff（1994），Ramat（1998），Fortson（2010²）による概観がある。

筆者は教育分野としてドイツ語学・ゲルマン語学を担当しており，日本語による適当な類書がないことに不便を感じてきた。日本では従来，英語とドイツ語についてはその古語も含めて，広く教育・研究が行われているが，その他のゲルマン諸語については極端な立ち遅れが目立つ。本稿では従来，看過されてきたマイナーな言語も考察の対象に含め，古語から現代語への発達を有機的に扱うことを目指している。大学教育での活用を念頭に置いて，基本的な概念についてもそのつど解説し，簡潔さとわかりやすさを重視しているが，同時に専門的な立場から独自性を織り込むことにも努めたつもりである。

今回，発表する部分は，ゲルマン諸語の簡単な紹介に続いて，印欧語を中心とする歴史比較言語学について，ゲルマン語のデータを援用しながら方法論的解説を施したものである。これはゲルマン語という概念が第一に歴史的

[1] ゲルマン語の歴史的発達を扱ったものとして，Howell/Roberge/Salmons(eds.)（近刊）の刊行が予定されている。

な系統関係に基づくことに加えて，ゲルマン語圏に属する北欧スカンジナヴィアとドイツ語圏の研究者が 19 世紀の歴史比較言語学の発達に大きな貢献を成し遂げた事実を重視したことによる。なお，本研究は科研費（21520425）の助成を受けており，その研究目的の趣旨に沿って執筆したものである。

II．歴史比較言語学とゲルマン語

1．ゲルマン語を構成する諸言語 ── 古語と現代語

1.1．言語の系統関係と親縁関係 ── 日本語とヨーロッパの諸言語

私たち日本人は外国語が苦手な国民といわれている。経済大国なのに英語もろくに話せない，などという評判を聞くのは耳の痛い話である。私たちは島国に住み，外国語を使う必要性が乏しく，植民地化という近代の不幸も経験しなかった。それに加えて，日本語には複数の言語が共通の源にさかのぼる「系統関係」（genetic relationship），あるいは言語間の歴史的な「親縁関係」が証明された同胞がどこにも存在しないという事情がある[2]。日本語を取り巻くアイヌ語や朝鮮語は，世界のどの言語とも親縁関係が不明な系統的に孤立した言語なのである。系統関係が不明な言語は今日でも少なくないが，日本語や朝鮮語のように話者数が多い大言語が隣接する極東地域は，稀な例外に属する。

一方，ヨーロッパの言語の多くは，古くは同一の「祖語」（基語，protolanguage, parent language）から派生した複数のグループから成り立っている。したがって，共通点が多く，習得が比較的容易である[3]。本稿で扱う「ゲルマン語」（ゲルマン諸語 Germanic languages）もその下位グループのひとつである。ゲルマン語は単一の言語ではなく，英語やドイツ語をはじめとして，ベネルクスや北欧の言語を含み，ヨーロッパ以外の広い地域でも話されてい

[2] 琉球列島の言葉を除く。なお，「日本語族」を表明する立場は考慮外に置くことにする。

[3] 言語間には系統関係のほかに，接触と借用によっても共通点が生まれることがあり，これが習得を容易にする要因にもなる。この点については現代ゲルマン諸語の章で後述する。

る諸言語の総称である。

1.2. 古ゲルマン語の仲間たち ── 系統樹説と波紋説

ゲルマン諸語は文献に残っていない古い時代のゲルマン祖語（Proto-Germanic）から発達してきた。その古語は歴史的に次のように分類される[4]。

ゲルマン祖語：
- (1) (a) †東ゲルマン語：
  - ① オーダー・ヴィスワ川ゲルマン語：†ゴート語など
- (2) 北西ゲルマン語：古ルーン語
  - (b) ② 北ゲルマン語：
    - 古ノルド語：
      - 古西ノルド語：古アイスランド語，古ノルウェー語
      - 古東ノルド語：古スウェーデン語，古デンマーク語，古ゴットランド語
  - (c) 西ゲルマン語：
    - (i) ③ 北海ゲルマン語：
      - 古英語，古フリジア語，古ザクセン語(＝古低ドイツ語)
    - (ii) 内陸ゲルマン語：
      - ④ ヴェーザー・ライン川ゲルマン語：古高（＝中部）ドイツ語（＝古フランケン語)，古オランダ語（＝古低フランケン語)
      - ⑤ エルベ川ゲルマン語：古高（＝上部）ドイツ語（＝古バイエルン語，古アレマン語)

この表の分類は，ゲルマン祖語から古ゲルマン諸語が一方的に分岐して生じたという仮定の上に立っている。しかし，下位区分された言語は，かなら

[4]「†」は今日では死語となっていることを示す。

ずしも単独の言語としての統一体を形成していたわけではない。たとえば，いわゆる「西ゲルマン語」は下位言語群の集合体とするのが今日では一般的な理解である。また，言語の発達には分岐だけでなく，相互の「言語接触」(language contact) による影響関係を考慮しなければならない。たとえば，今日のドイツ語（＝標準ドイツ語）の母体となった古高ドイツ語は，中部ドイツ語が属するヴェーザー・ライン川ゲルマン語と上部ドイツ語が属するエルベ川ゲルマン語にまたがっている。さらに，北海ゲルマン語に属する古ザクセン語の後裔である低地ドイツ語も，今日ではドイツ語の方言に含まれている。

祖語の発達を 1 本の木が枝分かれするのにたとえて，後代の諸言語に一方的に分かれていくとする考え方を「系統樹説」(family-tree theory) という。一方，それへの批判として提出されたのが「波紋説」(波動説，波状説，wave theory) である。池に落ちた石が波紋を広げるように，祖語の特徴は後代の諸言語に受け継がれていく。しかし，一部で新たな波紋が広がると，隣接した言語に影響を与え，当初とは異なる新たな「分岐」(divergence) や「収束」(convergence) を促すことがある[5]。この考え方は古ゲルマン諸語から現代ゲルマン諸語への発達過程に，とりわけ深く関係している。現代ゲルマン諸語の考察には，「言語類型論」(language typology) の視点が重要な役割を果たすことになる。

1.3. 現代ゲルマン語の仲間たち ── 言語と方言を分ける基準

それでは，現代のゲルマン諸語には具体的にどのような言語があるのだろうか。上の表で，今日では死滅した東ゲルマン語を除いて，北ゲルマン語といわゆる西ゲルマン語の 2 つのグループを基準にすると，およそ次のような

[5] 系統樹説は，6.1. で述べる青年文法学派以前の印欧語比較言語学を集大成したドイツ人の A. シュライヒャー（August Schleicher 1821〜68）によって唱えられた。波紋説は，その弟子で同じくドイツ人の J. シュミット（Johannes Schmidt 1843〜1901）が提唱した。

言語が含まれている。なお，次の表で「大陸北ゲルマン語」と「離島ゲルマン語」は下位言語群の総称であり，単独の言語ではない。

(1) 北ゲルマン語：
  (a) 大陸北ゲルマン語：ノルウェー語ブークモール（bokmål），ノルウェー語ニューノシュク（nynorsk），スウェーデン語，デンマーク語
  (b) 離島北ゲルマン語：アイスランド語，フェーロー語，†ノーン語
(2) 西ゲルマン語：
  (a) 英語
  (b) ドイツ語，ルクセンブルク語，(低地ドイツ語)，(スイスドイツ語)，ペンシルヴェニアドイツ語，イディッシュ語
  (c) オランダ語，アフリカーンス語
  (d) フリジア語群：西フリジア語，北フリジア語，東フリジア語
  (e) クレオール諸語

この表では，低地ドイツ語とスイスドイツ語をカッコに入れてある。これは両者がドイツ語圏に含まれ，ドイツ語の方言として位置づけられているためである。ただし，方言といっても，独自の言語的特徴を強く示しており，標準ドイツ語とは別個の扱いに十分に値する。ルクセンブルク語もかつては，西モーゼルフランケン方言というドイツ語方言の一員だった。それが 1984 年の言語法によって，公的に「言語」の地位に昇格したのである。ノルウェー語ブークモールとニューノシュクも，19 世紀の言語改革運動で新しく誕生した言語である。

こうした事実が示すように，「言語」(language) か「方言」(dialect) かという違いは，言語構造の相違にもまして，政治的・社会的理由によるところが大きい。つまり，「社会言語学」(sociolinguistics) 的な基準に大きく依存している。この点がとりわけ重要視されるのは，ヨーロッパの諸言語の特徴といえよう。極端に言えば，ヨーロッパでは話者が自分たちのお国言葉を「言

語」であると公的に強く主張すれば「言語」になり，しなければ「方言」の地位にとどまるか，「言語」から「方言」に格下げになることすらあり得るのである。この観点からすれば，ほかにも特記すべき方言は少なくないといえよう。

ゲルマン語に属する諸言語はもともと共通点を数多く共有しているが，同時にそれぞれ独自の特徴を備えている。かつて社会的に有力だった「威信方言」（prestige dialect）のいくつかが，政治的・社会的理由によって周辺の方言を包含したり，あるいは核となって周辺の方言の諸要素を取り入れる形で「標準語」（standard language）となるなどして，「言語」の地位を獲得した。一般にヨーロッパの人々は日本の私たちの想像以上に，言語の社会的地位という問題にきわめて敏感である。

なお，低地ドイツ語，スイスドイツ語，北フリジア語は全体を覆う統一的な標準語を欠いており，諸方言の集合体を指す便宜的な名称である。この事実も「言語」と「方言」の理解を複雑にする要因になっている。

最後に，上の表には「クレオール諸語」（creoles）が含まれている。これはヨーロッパ以外で，系統的にまったく異なる現地固有の言語とゲルマン語が混ざり合って，独自の言語に成長したものを指す。英語またはオランダ語を基礎にしたグループに分かれ，40〜50 種類にも達するといわれている[6]。

2．ヨーロッパの諸言語と印欧語族 ── 語派と語族

ゲルマン語以外に，ヨーロッパのおもな言語グループには，どのようなものがあるのだろうか。まず，フランス語，プロヴァンス語，スイス南東部とイタリア北部にまたがるレト・ロマンス諸語，スペイン語，カタロニア語，ポルトガル語，ガリシア語，イタリア語，サルジニア語，ルーマニア語など

[6] くわしくは Romaine（1994）参照。なお，古くは「言語」と「方言」の定義には歴史的基準が適用され，同系の諸言語をそれより以前の段階にある「言語」（ド Sprache）の「方言」（ド Dialekt）と呼ぶことが少なくなかった。たとえば，ドイツ語と英語はゲルマン祖語の方言と呼ばれていたのである。古い文献を参照するときには，この点に注意を要する。

が属する「ロマンス語」（ロマンス諸語 Romance languages）がある。さらに，ロシア語，白ロシア語，ウクライナ語(以上，東スラブ語)，ポーランド語，ポーランド語の方言ともみなされることがあるカシューブ語，ドイツ国内の上(かみ)・下(しも)ソルブ語，チェコ語，スロヴァキア語（以上，西スラブ語)，スロヴェニア語，セルビア語，クロアチア語，マケドニア語，ブルガリア語（以上，南スラブ語）などが属する「スラブ語」（スラブ諸語 Slavic/Slavonic languages）が挙げられる。

ゲルマン語を含むこの 3 者は各自の「語派」（branch）を形成し，ヨーロッパの広い地域を覆い，世界各地にまで広がっている。ロマンス諸語は豊富な文献を伝えるラテン語（Latin）という直接の祖語を有する点で，例外的な存在である。他の語派は祖語を文献にとどめていない。ただし，正確にはラテン語はラテン・ファリスク語群（Latino-Faliscan）に属し，今日では消滅したオスク・ウンブリア語群（Osco-Umbrian）とともに「イタリック語派」（Italic）を形成している。したがって，「ゲルマン語派」，「スラブ語派」にたいして，「ロマンス諸語」と呼ばれる[7]。イタリック語派の祖語はやはり文献では確認できない。

今日，ヨーロッパの人口に占める割合は，スラブ諸語が約 33.8％と最も多く，ゲルマン諸語が約 33.0％，ロマンス諸語が約 26.7％であり，この 3 グループだけで約 93.5％にも達する[8]。全世界では，ロマンス諸語の 5 億 8 千万人を筆頭に，ゲルマン諸語が約 4 億 5 千万人[9]，スラブ諸語が約 3 億人に及んでいる。これには話者数が多く，社会的威信が高い大言語が占める割合が突出している。ただし，各語派には「危機言語」（endangered language または imperiled language）に指定された少数言語も含まれている事実を忘れてはならな

[7] 以下では，誤解のない範囲で「ゲルマン語」，「ゲルマン諸語」，「ゲルマン語派」といった用語をとくに区別せずに用いることが多い。

[8] König（1998[12]：37）参照。

[9] König/Van der Auwera (eds.)(1994：1)，亀井/河野/千野（編）(1998：539）参照。Harbert (2007：前付け) ではゲルマン諸語の話者は 4 億 7 千万人。話者数の確定には類書によって異同がある。

い。

この 3 者だけがヨーロッパの言語世界のすべてではない。ほかにも，今日ではイギリスのウェールズ地方やスコットランド地方，アイルランドの一部，フランス北部のブルターニュ半島になごりをとどめる「ケルト語派」(Celtic) がある（注 47 参照)。ケルト語族は紀元前 5 世紀頃からローマ時代の紀元前１世紀にかけて，アルプス以北のヨーロッパを広く支配した語派であり，使用地域は小アジア中央部のガラテア（ラ Galatia，ラ Celtae「ケルト人」と同源）にまで及んでいた。また，リトアニア語とラトヴィア語を含む「バルト語派」(Baltic) も挙げられる。現存するこの両言語は東バルト語に属しており，西バルト語に属する古プロシア語とヤトヴィンギア語はわずかな文献を残して死滅した。さらに，単独の言語で語派を形成する「ギリシャ語派」(Greek) と「アルバニア語派」(Albanian) が加わる。同系（＝同一の系統）の諸言語が属する最大の単位を「語族」(family of languages, language family) という。後述する中東からインド亜大陸のアジアの諸言語を含めて，上記の一連の言語が歴史的に属する語派を合わせて，「印欧語族」または「インド・ヨーロッパ語族」(Indo-European)[10] と呼んでいる。

3．歴史言語学と言語比較 ── 数詞「1，2，3」とゲルマン語の n，r を例に

3.1．ヨーロッパ諸語の親縁関係 ── 数詞「1，2，3」の対応

印欧語族に属するヨーロッパの諸言語が系統的に同一であり，たがいに親縁関係にあることを示す例として，数え上げるときに使う数詞の語形を英語（ゲルマン語)，フランス語（ロマンス語)，ロシア語（スラブ語）で比較して

[10] たんに「印欧語」,「印欧諸語」と呼ぶこともある。ヨーロッパの諸言語の概説については，亀井・河野・千野（編）(1998)，泉井（1968）参照。非印欧語族に属する言語には，系統不明のバスク語のほかに，ウラル語族のフィン・ウゴル語派に属するハンガリー語，フィンランド語，エストニア語，スカンジナヴィア半島北端部からコラ半島に分布するサーミ語 (ラップ) 語，ロシア領カレリア地方のカレリア語などがある。なお，ロマ (ジプシー，ツィゴイナー，ツィガーヌなど) の人々の言語であるロマ語 (ロマ (ー) ニ (ー) 語）は，後述する印欧語族のインド語派に属する。

みよう[11]。

英　one［wʌn］「1」　two［tu:］「2」　three［θɹi:］「3」
フ　un［ɛ̃］　deux［dø］　trois［tʁwa］
ロ　odno［adʹnɔ］　dva［dvɑ］　tri［trji］

この3言語は紀元前からすでに別の言語であり，上の3語の中でまったく同じ音（言語音を指す場合には「おと」ではなく，伝統的に「おん」と読むことが多い）はひとつもない。しかし，この同系の3言語の例は，背後に潜む規則的な対応によって結ばれている。印欧語では，系統は異なるものの，地理的に隣接するアラビア語やヘブライ語などが属するセム語族と同様に，母音の音価は変化が激しく，子音は構造的に比較的安定している[12]。そこで子音に注目すると，英語の two の t はフランス語の deux とロシア語の dva では d として現れ，英語の three の th［θ］は両言語の trois と tri では t として現れている。これは英語の t および th［θ］が，それぞれ対応するフランス語とロシア語の d および t と古くは同一の子音だったことを予測させる[13]。

n と r は発音がかなり異なっている。n は英語とロシア語では独立した子音だが，フランス語では直前の鼻母音に吸収されている。英語の r［ɹ］は舌先を上側の歯茎に近づけるが，ロシア語の r［r］は舌先を持ち上げて歯茎に当ててふるわせ，フランス語の r［ʁ］はのどの奥の口蓋垂を摩擦させる発音が標準的である。しかし，それでも n と r は3言語とも同じ文字で書かれている。文字表記，すなわち「正書法」（orthography）は古い時代の発音を反

[11] ロシア語は中性主格形だけを示す。ラテン文字以外の欧文の用例は，原則としてラテン文字に転写して示す。

[12] セム語族の伝統的な文字表記では子音だけを記し，母音は省略したり，補助記号で表すことが多い。つまり，語彙的意味の中心は子音にある。古くは，北ドイツの北フリジア語圏に属するジュルト島（ド Sylt/北フ Söl）出身の H.メラー（Hermann Möller 1850〜1923）を筆頭として，セム語族と印欧語族の親縁関係が熱心に唱えられたこともある。

[13] これについては「子音推移」の項で後述する。

映している場合が多い。

3.2. 歴史比較言語学の視点 ── ゲルマン語の n をめぐって

3.2.1. n の性質 ── 同化と脱落

それでは，ゲルマン語の n と r をめぐって，歴史比較言語学の基本的な概念を紹介しながら，ゲルマン諸語の相互比較の具体例を示してみよう[14]。

まず，一般に n は最も隣接音の影響を受けやすく，不安定な子音に数えられる。隣接音の影響を受けて，類似した調音位置や調音方法に変化することを「同化」（assimilation）という。オランダ語やオランダ第 2 の公用語の西フリジア語では，n が後続または先行する子音との同化を起こし，[m]（-np-[mp]），[ŋ]（-nk-[ŋk]），[ɲ]（-nj-[ɲ]）などと交替しやすい。英語の think [θɪŋk]「考える」やドイツ語の denken ['dɛŋkən] > ['dɛŋkn̩] > ['dɛŋkŋ̩]「同左」の -nk- [ŋk]，-ken- [kn̩] > [kŋ̩] もその例である。日本語も同様だが，自然にそうなるので，気がつかずに「ん」と書いてすませている。

n はまた，後続する音と連続する場合に，とりわけ音節末で脱落しやすい子音である。英語では my book「私の本」の my「私の」と This book is mine.「この本は私のものです」の mine「私のもの」は別の語だが，古英語ではともに mīn「私の，私のもの」という同じ語だった。ドイツ語では mein Buch「同上」，Dieses Buch ist mein.「同上」のように，ともに同じ mein であり，-n を保っている。同様に，オランダ語の mijn や西フリジア語の myn も「私の，私のもの」という両方の意味を表す。後続する語と連続して発音する英語の my は，語末の -n が脱落した語形なのである。英語と同様の例としては，アフリカーンス語に my boek「私の本」と Hierdie boek is myne.「この本は私のものです」という my「私の」と myne「私のもの」の区別が見られる。

3.2.2. 英語の不定冠詞 a/an の歴史的解釈 ── 接語化と異分析

このことは，英語の不定冠詞が「a＋子音」と「an＋母音」に分かれること

[14] ゲルマン諸語の n の脱落に伴う先行母音の鼻音化については 4.4. で述べる。注 32 参照。

と関係がある。古英語の不定冠詞は ān であり，現代英語では連続して発音する子音の前で -n が脱落して a となり，母音の前では an として保たれたのである。一方，a/an と同源の数詞 one「１」（古英 ān）は -n を保っている。one も one book「１冊の本」のように，次の単語と連続することがあるが，a/an と違ってアクセントを持つので，脱落しにくかったと考えられる。a/an のようにアクセントを持たず，前後の語に寄り添うように発音する弱くて短い機能的な語を「接語」（クリティック，clitic）という。後続の語に「接語化」（cliticization）した a/an は，後続の語とひと続きに発音される。つまり，ひとつの「音韻論的語」（phonological word）を形成するので，語の境界があいまいになりやすい。古くは，中英 a napron＞近英 an apron「エプロン」，中英 an ekename＞近英 a nickname「あだ名」のように，a と an の間で語形的な揺れがあった。このように，本来の語境界とは異なる分けかたをしてしまう現象を「異分析」（metanalysis）という。

さて，英文法の規則では，「不定冠詞の a は母音で始まる語の前で -n を付加される」となっている。しかし，歴史言語学的な解釈は逆なのであって，子音の前で an の -n が脱落したのである。このように，歴史言語学の視点は，現代語あるいは過去のある特定の時点における言語構造の規則とは異なる解釈をもたらすことがある。ただし，両者はそれぞれ「通時態」（diachrony）と「共時態」（synchrony）という別の次元で正しいのであり，混同しないことが肝要である。

その他のゲルマン語では，イディッシュ語が英語と共通しており，数詞の eyns［ɛɪns］「１」にたいして，不定冠詞は「a＋子音」と「an＋母音」に分かれる。不定冠詞が語末の -n をつねに伴う例は，ドイツ語 ein，オランダ語 een，西フリジア語 in，スウェーデン語とデンマーク語 en など数多い。ただし，アフリカーンス語 ’n［ə］のように，後続音の種類と無関係に -n が脱落し，正書法にかつてのなごりをとどめている例も少数ある。

3.2.3. ルクセンブルク語の「アイフェル規則」── 共時的現象としてのｎの脱落

ｎの脱落が最も広範囲で共時的（synchronic）な規則として観察されるのは，ルクセンブルク語である。ルクセンブルク語では，不定冠詞や所有代名詞に限らず，一般に母音，母音に近い子音[h]，歯茎音[n]，[t]，[d]，[ts]([dz])の前で語末の -n が保たれ，それ以外では規則的に脱落する。

ル　en/mäin {Apel/Haus/Dram}「ある/私の {リンゴ/家/夢}」↔e/mäi {Buch/Foto}「ある/私の {本/写真}」
hien danzt「彼は踊る」↔hie këннt「彼は来る」
wann hie këннt「彼が来れば」↔wa se këннt「彼女が来れば」
Ech komme(n) {vu Paräis/vun Amsterdam}.「私は {パリ/アムステルダム} の出身です」

次の語と続けて発音しない文や句の終わりでは，この限りではない。たとえば最後の例では，komme(n)「来る，出身である」の -n は前置詞 vu(n)「…から」と続けて発音すると脱落し，区切って発音すれば脱落しない。ルクセンブルク語のｎの脱落にかんするこの規則は，伝統的に「アイフェル規則」(ド Eifler Regel) と呼ばれている。「アイフェル」(ド Eifel) とは，ルクセンブルクの北東に位置し，ライン川左岸に広がる高原の名前である。

英語の my/mine や a/an の区別は，これに類する規則が歴史的にはたらいた例として，ゲルマン諸語の語末のｎの保持と脱落をめぐる諸例の中に位置づけることができる。このように，ゲルマン語全体を視野に入れると，単独の言語では捉えられない他の同系の言語と関連づけた考察が可能になることがある。

3.3. 内的再建と比較方法 ── ゲルマン語のｒをめぐって

3.3.1. ｒの性質 ── 音価の多様性と脱落

今度は，もうひとつの子音ｒについて考えてみよう。ｒは調音位置と調音方

法が最も多様な子音であり，IPA（国際音声字母 International Phonetic Alphabet）でもそれぞれ異なった表記をする。デンマーク語や西ノルウェーのニューノシュクの r［ʁ］は，フランス語に似て口蓋垂を摩擦させる。ドイツ語では舌先をふるわせる r［r］の地域もあるが，口蓋垂をふるわせる r［ʀ］が標準語の規範とされている。しかし，実際には口蓋垂を摩擦させる r［ʁ］が圧倒的に多く[15]，以下でもこの表記を採用する。その他の北ゲルマン語や標準オランダ語の r［r］は，原則としてロシア語のように舌先を持ち上げてふるわせる。英語のような舌先歯茎接近音の r［ɹ］は，むしろ稀な例であり，17 世紀まではやはり舌先ふるえ音だったとされている。元来，オランダ語，デンマーク語，ドイツ語の r には方言差があり，その中でも舌先を持ち上げてふるわせる発音が有力だった。しかし，18 世紀に有力なフランス語の影響で，のどの奥の発音が規範になったという説がある。オランダ語では近年，舌先をふるわせる発音を再び規範としたが，実際のオランダ語話者の r は，アメリカ英語的な発音も含めて多種多様である。つまり，それほど変わりやすい子音なのである。舌先で出しても，のどの奥で出しても同じだというのは，閉鎖音でいえば t と k の区別をしないようなもので，いかにも意外な印象を受ける[16]。

---

[15] Duden 6（2005[6]：53 f.），Krech et al.（2009：85）参照。

[16] ただし，印欧祖語の歯茎摩擦音 *s がギリシャ語などで，のどの奥で出す声門摩擦音 *h に変化した例は存在する。例．*s(w)eks「6」（ラ sex，英 six）＞ギ héks，*septm̥「7」（ラ setpem，英 seven）＞ギ heptá，*sēmi-「半分の」（ラ sēmi-，英 semicircle「半円」＞ギ hēmi-，英 hemisphere「半球」）。しかし，それでもギリシャ語の s と h はそれぞれ独立の音素であり，同一音素の異音ではない。*s＞h の変化は古代ペルシャ語，アヴェスタ語，アルメニア語でも起こった。Watkins（1969），寺澤（編）（1997：1652）参照。
類例として，ケルト語派の P-ケルト語（ブリトン諸語，Brittonic, Brythonic）に属し，フランス北部ブルターニュ半島で話されているブルトン語では，かつての z/tz[θ]，[ð] が方言間で z［z］と h［x］に分かれて変化した。すなわち，ブルトン語を構成する 4 方言の中で，コルヌアイユ方言，レオン方言，トレギエ方言の 3 方言（KLT）では［z］（例 Breiz「ブルターニュ」），残りのヴァンヌ方言では［x］（例　Breih「同左」）として現れる。Stephens（1993：351），ヴァルテール（平野 訳 2006：117）参照。また，よく知られているように，スペイン語の j［ʒ］/g（＋i/e）［ʒ］/x［ʃ］＞［x］という変化もある。

r はまた，n と同様に不安定で，なくなりやすい子音でもある。デンマーク語やドイツ語では，音節末の r は弱い「ア」（デ［ɐ］，ド［ʁ］）に母音化し，無アクセント音節末の -er でも弱い「アー」（デ［ɒ］]，ド［ɐ］）に母音化する。音節内部の位置に応じて，子音にも母音にもなる音を音韻論的に「半母音」（semivowel）という。デンマーク語やドイツ語の r は半母音であり，子音としての性格が弱いといえる。さらにイギリス英語では，アメリカ英語と違って，18 世紀頃以来，母音が後続しない「母音＋r」の r を発音しなくなっている（teacher［ˈtiːtʃə］「教師」，card［kɑːd］「カード」，carp［kɑːp］「鯉（こい）」）。西フリジア語でも，調音位置が等しい歯音（s/z，l，d，t，n）が後続すると，r は規則的に脱落し（kaart［kaːt］「カード」，bern［bɛːn］「子供」），スウェーデン語やノルウェー語ブークモールでは，後続する歯音を舌先を持ち上げた「そり舌音」（retroflex）にして脱落する（kort［kuʈ］「カード」，barn［bɑːɳ］「子供」）。

最後に，ドイツ語には「前置詞＋da(r)-」の形で用いるいわゆる副詞的代名詞 da(r)-「それ」がある。前置詞とともに用いる代名詞で，r を含むために，一般に「r- 代名詞」（r-pronoun）と呼ばれる。ここでは darin「それ（dar-）の中に（in）」の dar-にたいして，dazu「それ（da-）に加えて（zu）」の da-「それ」のように，dar-の r は歴史的に子音の前で脱落した。これは英語の therein「それの中に」と thereto「それに加えて」の there-「それ」が r を保っていることから明らかである。これは上述した英語やイディッシュ語の不定冠詞の -n の脱落に，条件が似ている。

しかしながら，上述のように多様な「変異形」（variant）として現れるゲルマン語の r と n は，それぞれ同一の文字で書かれ，言語間でもたがいに対応する音として認識されている。とくに r はオランダ語やドイツ語のように個別言語内部で複数の「異音」（allophone）を含み，意味の区別に関与する音韻論的単位，つまり「音素」（phoneme）としても，音価が言語ごとに異なっている。それでも，英和辞典や独和辞典で子音としての r の発音を便宜的に［r］と表記していても，ふつうは不思議に違和感を感じない。

3.3.2. ゲルマン語の r の起源 ── ロータシズム，内的再建と比較方法

それでは次に，上記のゲルマン諸語の r はもともと舌先の発音だったのか，のどの奥の発音だったのかという問題を考えてみよう。厳密には古語を素材としなければならないが，ここでは便宜的に現代語を頼りにすることにしよう。ゲルマン祖語の r は舌先で調音していたと推定されている。それは端的には，英語の was～were という語形変化での s～r という交替からうかがえる。ドイツ語の Verlust［fɛɐ̯'lʊst］「喪失」～verloren［fɛɐ̯'lo:ʁən］「失われた」（verlieren「失う」の過去分詞）という派生語間での s～r の交替も同様である。これは母音などの有声音にはさまれた無声の［s］が歴史的に無アクセント位置（＝直前の母音がアクセントを持たない場合）で［z］に有声化し，さらに［z］と同じく舌先を持ち上げる［r］に変わった結果である。この音韻変化を「ロータシズム」（rhotacism）という[17]。強変化動詞の過去分詞および過去複数形（verloren，were）では，歴史的に語幹ではなく，（s＞）r に後続する音節にアクセントがあった。その場合には，s を含む無声摩擦音は有声音に変化した。一方，不定詞・現在形・過去形単数では語幹にアクセントがあったので，後代の類推を除いて，この有声化は起こらなかった。英語の was やドイツ語の Verlust はロータシズムを免れたのである。ロータシズムによって生じた（z＞）r は本来の r と同一の音になった。もし r がのどの奥で発音する子音だったとすれば，この現象は説明に苦しむことになる。文献以前の時代の祖語の姿を推定することを「再建」（reconstruction）という。とくにこの場合のように，ひとつの言語内部の事実に基づいて文献以前の言語の構造を推定する方法を「内的再建」（internal reconstruction）という[18]。

---

[17] これには後述する「ヴェアナーの法則」によるアクセントの交替が関係している。古ゲルマン語ではゴート語が唯一，ロータシズムを示さない（例．ゴ wisan～was～wēsum（英 be～was～were））。ただし，これは類推による平均化の結果とも考えられる。Lehmann（1994：21），Fortson（2010²：21）参照。なお，［z］はおそらく英語のような舌先接近音などを経て，舌先ふるえ音に変化したと考えられている。神山（1995：255）参照。そうだったとすると，英語は近代の時代にさらに逆の変化を被ったことになる。

[18] 内的再建の最も有名な例は，ソシュール（Ferdinand de Saussure 1857～1913）が印欧

一方，複数の言語の事実を比べてこれを行うのが「比較方法」(comparative method) である。たとえば，オランダ語の verliezen [vərˈli:zə(n)]「失う」とドイツ語の verlieren [fɛɐ̯ˈli:ʁən]「同左」，英語の stones「石（複数形）」とアイスランド語の steinar「同左」を対比するのがそれである。オランダ語の動詞不定詞 verliezen はドイツ語の verlieren とは違って，過去分詞と過去形複数からの類推を受けずに，ロータシズムとは無縁の本来の語形を保っている。一方，逆にアイスランド語の名詞複数形 steinar は，北ゲルマン語として規則的に名詞の複数形を示す語末の s が z を経て r に変化した革新的な語形である。このように，各言語でのロータシズムの起こりかたの違いが比較方法に有意義な事実を提供している。

日本語のように系統的に孤立した言語の歴史的解明は，内的再建に頼るところが大きい。一方，ヨーロッパの言語の多くは，比較方法によって音韻対応が確定できるのである。

3.3.3. 類推の役割 ── 語形変化の整合性

さて，ドイツ語の war（英 was）と waren（英 were）ではともに r が現れている。waren がロータシズム（[s]＞[z]＞[r]）の結果であることは，s[z] を示す名詞 Wesen ['ve:zn̩]「存在」（英 being）との比較からうかがえる。それでは，war という語形はどのように説明されるだろうか。ドイツ語史をひもとくと，中高ドイツ語 (1050 頃〜1350 頃) の段階では war はまだ英語と同じつづりの was（s [s]）だった。すでにその時代には「音節末の有声障害音の無声化」(final devoicing) が起こっており，いずれにしても war はロータシズムの結果ではあり得ない。じつは，過去形単数 was＞war の変化は過去形複数 waren への「類推」(analogy) による[19]。同じ動詞の過去形が単数と

語の母音交替の説明のために仮定した「ソナント的係数」(フ coefficient sonantique，母音と同様にソナント（音節主音）としてはたらく音）である。これは後にヒッタイト語の解読で実証され，「喉頭音理論」(喉音理論，laryngeal theory) に発展した。亀井/河野/千野（編）(1996：534–536) 参照。

[19] Fortson (2010²：346) によれば，英語の was〜were における s〜r の交替は，現代ゲル

複数で語幹が異なるのは，語形変化の透明性という点で形態論的に不自然という意識が働いたのである。同様に，上記のドイツ語の不定詞 verlieren，過去単数形 verlor は，過去形複数・過去分詞 verloren との類推からロータシズムによる s>r の変化を示すようになった[20]。

このように，類推は「通時的」(diachronic)な音韻変化を無視し，「共時的」(synchronic) な整合性を求めて起こる「意図的」で「不規則」な現象である。その反面で，類推は「盲目的」な音韻変化の結果を是正し，語形と意味の両面から「規則性」を回復する重要なはたらきもする。音韻変化はときには嵐のように降りかかり，言語構造を凹凸状の表面に変えてしまう。それにかんなをかけるように，再びなめらかさを取り戻してくれるのが類推による恩恵である[21]。

4．音韻変化と音韻対応 ──「言語，舌」を表す語を例に

4.1．音韻対応と基礎語彙 ── 系統関係の決め手

言語の系統関係あるいは親縁関係を決定するものは，何だろうか。最も重要なのは，文法構造の類似性にもまして，「音韻対応」(音対応 sound correspondence) と呼ばれる基準である。これは祖語から継承された「基礎語彙」(basic vocabulary)に含まれる個々の音の規則的な対応関係の集積を指す[22]。

マン諸語で同一の時制の変化形が類推を受けずにロータシズムの有無を保つ唯一の例であるという。しかし，これは誤りである。オランダ語の was〜waren，北フリジア語モーリング方言の wus〜wjarn，低地ドイツ語ヴェストファーレン方言の wass〜wöören も s［s］〜r の交替を示す。清水（1992：117），Durrell（1990：83）参照。

[20] 北ゲルマン語では，対応する動詞の語形変化と派生語ですべてロータシズムが起こった。アイスランド語で例を示すと，不定詞 vera(英語 be)，過去形 1 人称単数形 var，過去形 1 人称複数形 vorum，過去分詞 verið，名詞 vera「滞在」となる。

[21] ソシュール（小林訳 1972：225-234，de Saussure 1978（1916）：221-230）に類推の意義とロータシズムについての有名な解説がある。

[22] 一般に基礎語彙は日常生活に不可欠で頻度が高く，幼少期に習得する語彙とされている。ただし，その認定はかならずしも容易ではなく，歴史比較言語学への適用にも注意を要する。たとえば，値の低い数詞は印欧語では借用の対象になりにくいが，日本語のよう

「音韻変化」（音変化 sound change）は網羅的に起こり，本質的に意味とは無関係である。世界の諸言語には約 200 種類の母音と 600 種類以上の子音があるといわれるが[23]，音素の数は各言語で数十個にとどまり，全体で緊密な構造を成している。語の多くは複数の音素で構成されているので，累積すればかなりの精密さが期待できる。また，音韻対応の確定には厳密な手続きが必要なので，恣意的な解釈を排除できる[24]。

4.2. 類推と民間語源 ── 語形と意味の類似性

音韻対応で重要なのは「対応」であって，表面的な「類似」ではない。一見，似ていない語形についても主観的判断に流されずに，音韻対応によって同一の起源に由来することがわかる場合がある。これは比較方法の大きな利点である。上記の 3 言語から「言語」または「舌」を表す語を例に取って，ゲルマン語の事例に照らしつつ，本稿の理解に必要な基本概念の紹介を交えながら解説してみよう[25]。

英　tongue［tʌŋ］　　フ　langue［lɑ̃g］　　ロ　jazyk［jɪˈzɨk］

言語は舌を使って発するものだから，この意味的関連は自然だが，語形はかなり異なっている。英語の tongue の t は上記の数詞「 2 」，「 3 」の例からわかるように，かつては d だったと推定される。じつは，フランス語の langue

---

に中国語からの借用語彙が広く入り込んでいる言語も少なくない。「ひとつ」，「ふたつ」，「みっつ」にたいして，「いち」，「に」，「さん」を日本語の数詞として比較の素材とすることは，当然ながら不適切である。

[23] Ladefoged（2001：xix）参照。

[24] 歴史比較言語学における音韻対応は，古くは「音韻法則」（音法則 sound law）の名で呼ばれることが多かった。しかし，個別言語での 1 回限りの現象を「法則」と呼ぶことは不自然であるなどの理由で，あまり用いられなくなっている。

[25] 以下の解説はゲルマン語にかんする部分を除いて，マルティネ（神山 訳 2003：144–146，Martinet 1994[2]（1986）：128–130）によっている。

は祖語のラテン語では lingua だが[26]，さらに古い時代にさかのぼる古ラテン語では dingua だった。つまり，d が同じく舌先を両端の部分まで広く上の歯茎の裏に当てる l に変わったのである。d>l の変化の類例には，ラテン語の lacrima「涙」（古ラ dacruma，ギ dákru）がある。ただし，この d>l の変化は散発的であって，正規の音韻変化とはいいがたく，これによって d と l の対立が失われたわけでもない。dingua＞lingua の変化をとくに助長したのは，lingere「なめる」との語形的・意味的類似性だったとされている。これは上述の「類推」による誤った語源，すなわち「民間語源」（通俗語源 folk etymology）の例である。英語の tongue の -u- も，フランス語の langue との類推から後になって付加された。中英語（1100 頃〜1500 頃）の時代には，まだ tunge，tonge（＜古英 tunge）とつづっていた。

4.3. 成節子音の役割 ── 母音の代替と音節の保持

ロシア語の jazyk には，この d もそれに続く n もない。じつは，もともと d と n の間には母音がなく，「印欧祖語」（Proto-Indo-European）の推定形は *dn̥ghū と再建される（再建形は星印「*」で示す[27]）。英語とフランス語では，母音的な性質をもち，単独で音節を形成できる「成節子音」（syllabic consonant）の n̥［n̩］が「ソナント」（音節主音 sonant），すなわち「音節核」（nucleus）となって，tongue（＜古英 tunge）と langue（＜ラ lingua）の母音 o（＜u），a（＜i）を産み落としたのである[28]。

これと逆の場合として，今日の英語でたとえば hidden［ˈhɪdən］「隠された」が「あいまい母音」（シュワー schwa）の［ə］を欠く［ˈhɪdn̩］と発音され，［n̩］が音節核を形成する現象が挙げられる。-den［dn̩］は独立した音節であ

[26] 英語の language「言語」と linguistics「言語学」はフランス語からの借用である。

[27] 印欧祖語の「語根」（roots）は Watkins（1969），Watkins（ed.）（2000²），寺澤（編）（1997：1615–1644）にまとめて掲載されている。Watkins（1969）では 1403 の語根を示しているが，1992 年の第 3 版では疑わしいと判断されたものを除いて，594 に減少している。

[28] この n̥ の「̥」は国際音声字母（IPA）の無声化の記号とは異なる。

り，[ˈhɪdn̩] はあくまで 2 音節である。類例はドイツ語の bitten [ˈbɪtən]→[ˈbɪtn̩]「頼む」や西フリジア語の riden [ˈridən]→[ˈridn̩]（ride「乗り物で行く」の過去分詞）など，幅広く見られる。同一音節に成節子音がなければ，無アクセントの母音は弱化し，ついには脱落して，音節はたんなる子音連続になってしまう。成節子音の候補には n̥ [n̩] のほかにも m̥ [m̩]，l̥ [l̩]，r̥ [r̩] があるが，これは後述する「母音交替」でも重要な役目を果たす。

4.4. 摩擦音の直前の n の脱落 ── 母音の鼻音化との関連

ロシア語では，一般的に発音しにくい *dn̥ の d が脱落してから，*n̥ が母音 i を産み落とした。in- はフランス語の langue の -an- [ɑ̃] と同じく，n [n] が母音 i [i] に吸収されて脱落し，鼻母音 in- [ĩ] となったが，後に鼻母音性を失い，最終的に ja- に至った（[ĩ]＞[i]＞je [jɛ̃]＞ja]）。鼻母音はポーランド語（język [ˈjɛ̃zɨk]「言語，舌」）に残っているが，ロシア語など他のスラブ諸語では失われている。

じつは，これは英語で摩擦音の直前の n が消失した歴史的事実と関係がある。ゲルマン語として鼻母音を有する一例に，西フリジア語がある。西フリジア語では「母音＋n＋摩擦音」が同一音節にあると，n が母音に吸収されて「鼻音化」（nasalization）が起こる（ik ken [kɛn]「私は知っている」―(do) kenst [kɛ̃st]「君は知っている」）。鼻腔に気流を送りこむために軟口蓋（口蓋帆）を下げ，上の歯茎に舌先を当てて口腔を閉鎖する n は，口腔への気流を必要とする摩擦音によって閉鎖が困難になり，鼻音としての性質は先行する母音へ受け継がれる。この鼻母音が鼻音性を失って口母音になれば，本来の n は痕跡を残さずに完全に失われることになる（Vn＞Ṽ＞V̄（＞V））[29]。鼻音化は n の消失の一歩手前の現象といえる。このことは次の比較からも理解されよう。

[29] V は母音（vowel），C は子音（consonant）の略である。「˜」は鼻音，「¯」は長音の記号。

ド Wunsch［vʊnʃ］/オ wens［ʋɛns］—西フ wynsk［vẽ:sk］—英 wish［wɪʃ］「望み」

西フリジア語では，歴史的に摩擦音の直前で n がすでに消失した語形が散見される。この点は英語も同様であり，後述する北海ゲルマン語の歴史的な特徴に数えられる。一部でオランダ語にも見られるこの現象は，ドイツ語では起こっていない。

英　goose［gu:s］「ガチョウ」—us［ʌs］「私たち（目的格）」—five［faɪv］「5」
西フ　goes［guəs］—ûs［ys］—fiif［fi:f］
オ　gans［ɣɑns］—ons［ɔns］↔vijf［ʏɛif］
ド　Gans［gans］—uns［ʊns］—fünf［fʏnf］

ただし，ドイツ語でも歴史的に n が消失した例がある。それは kt という発音しにくい閉鎖音の連続を嫌い，「異化」（dissimilation）によって前半の［k］を摩擦音［x］に変えて，［xt］となった子音連続が続くときである。この場合には，さすがに n による口腔の閉鎖が解かれた。次に挙げるのは，今日では不規則な弱変化動詞の例である。古くは英語の thought の gh は，西フリジア語の ch などと同様に［x］と発音されていたのであり，ou も鼻母音だったにちがいない[30]。

[30] この 4 言語の動詞語幹 i〜ou，i〜o，e〜a の交替は，ドイツ語とオランダ語の e（＝ä）〜a に端的に見られるように，不定詞（ゲ *-jan）では語幹形成要素の i/j が後続するためにウムラウト（ド Umlaut）が起こり，過去形と過去分詞では i/j が脱落したためにウムラウトが起こらなかったことによる（古英 þynċan/ þenċan，ス tänka，ゲ *þaŋkjan）。ウムラウトをまったく欠くゴート語の変化形を参照（ゴ þagkjan—þāhta—-þāhts）。この動詞は英語の bring「持って来る」—brought—brought，seek「探す」—sought—sought，ドイツ語の bringen—brachte—gebracht，オランダ語の brengen—bracht—gebracht，zoeken—zocht—gezocht，西フリジア語の bringe—brocht—brocht，sykje—socht—socht とともに，不規則な弱変化動詞とされるが，古くは規則的に変化してい

た弱変化動詞である。一方，ドイツ語の suchen—suchte—gesucht「探す」は後述する第２次子音推移によって k [k]＞ch [x] の変化を被ったので，今日でも規則的な弱変化動詞のままである。

英 think—thought—thought や上記のゴート語の対応例で短音 i（ゴ a）と長音 ou（ゴ ā）が交替するのは，in（ゴ gk [ŋk]/nk/）の n（ゴ/n/）が消失したことを長母音化によって補い，語の韻律的な長さを保とうとする「代償延長」（compensatory lengthening）の結果による（V＋n＞$\tilde{\text{V}}$＞$\bar{\text{V}}$）。代償延長はゲルマン語の古語だけでなく，印欧語比較言語学でも重要な役割を果たす。注 18 で言及したように，ソシュールの提唱によって開拓された喉頭音理論では，「長母音～短母音～ゼロ」の母音交替の説明のために代償延長が欠かせない前提になっている。すなわち，印欧祖語の長母音は「短母音＋喉頭音」において，喉頭音（ラリンガル，laryngeal）の消滅に伴う代償延長の結果として生じた（*eH$_1$＞*eH＞*ē，*eH$_2$＞*aH＞*ā，*eH$_3$＞*oH＞*ō）。これによって，長短の区別が印欧祖語に初めて導入された。神山（2006：236–259）参照。

代償延長が起こる背景には，古ゲルマン諸語がひとつの短音を長さの最小単位，すなわち「モーラ」（mora）として，韻律的な長さによって語形変化が制限を受ける「モーラ言語」（mora language）だったという事情がある。ひとつの短母音または短子音は 1 モーラ，長母音や二重母音または長子音や二重子音は 2 モーラに相当する。この点では日本語に部分的に似ている。たとえば，上記の動詞で過去形と過去分詞でウムラウトを引き起こす i/j が脱落したのは，ゴート語の þāh- のように，語幹部分が「長母音＋短子音」という 3 モーラから成る「長語幹」だったことによる。2 モーラ以下から成る「短語幹」では，この変化は起こらなかった。長語幹でも i/j が脱落せずに，過去形と過去分詞がウムラウトを保つこともあったが（ド senden—sandte—gesandt「送る」↔senden—sendete—gesendet「放送する」，ゴ sandjan，ス sända），短語幹では原則として i/j は脱落せず，ウムラウトが起こった。英語を除く 3 言語では，おそらく第 1 音節へのアクセントの固定に伴う後続音節の弱化によって，代償延長が相殺されて短母音として現れている（ド dachte＜古高ド dāhta）。このことによって，現代西ゲルマン諸語ではモーラ言語としての性質が表面的には見えにくくなっている。ただし，現代西ゲルマン諸語には，詳細は省くが，モーラ言語としての性質を保っていると考えられる現象が随所に散見される。

一方，現代北ゲルマン諸語は，デンマーク語を除いて，モーラ言語としての性質を明確に保っている。すなわち，有アクセント音節の構造は「韻」（rhyme）を形成する「音節核」（nucleus）の母音とそれに続く「音節末尾」（coda）の子音のどちらか一方が長くなければならない（-$\bar{\text{V}}$C，-VVC，-V$\bar{\text{C}}$，-VCC）という「音節均衡」（syllable balance）の制約によって，構造的に規定されている。古くは両者がともに短い音節（-VC）やともに長い音節（-$\bar{\text{C}}\bar{\text{V}}$，-CCVV，-$\bar{\text{C}}$VV，-CC$\bar{\text{V}}$）が許されていたが，現代語では排除されている（一部の変化形を除く）。たとえば，*[tak]，*[ta:k:]，*[ta:kt] という音節はもはや

英　think［θɪŋk］「考える」—thought［θɔ:t］—thought［θɔ:t］
西フ　tinke［'tɪŋkə］—tocht［tɔxt］—tocht［tɔxt］
ド　denken［'dɛŋkn̩］—dachte［'daxtə］—gedacht［gə'daxt］
オ　denken［'dɛŋkə(n)］—dacht［dɑxt］—gedacht［ɣə'dɑxt］

鼻音化に続く n の消失は，スカンジナヴィアの北ゲルマン語でも広く見られる。たとえば，英語の wish，goose はアイスランド語の ósk［ousg̊］（＜*õnsku＜*wunsku[31]），gæs［ɟ̊æis］（＜*gãns＜*gans）に対応する。それだけではない。北ゲルマン語では，語末の「母音＋n」の n が鼻音化を経て広く消失した。その結果，英語の前置詞 in，on（ド in，an）はアイスランド語とフェーロー語で í，á，スウェーデン語，デンマーク語，ノルウェー語で i（＜*ĩ＜*ĩn），på（＜opp＋å，英 upon）（＜*ã＜*ãn）となった。動詞の不定詞もドイツ語の「語幹＋-en［ən］」（finden［'fɪndən］→［'fɪndn̩］「見つける」，英 find）にたいして，「語幹＋-e/-a」（デ finde，ノ finne，ス・ア・フェ finna＜*finnãn＜*finnan＜*finþan）のように，完全に n を欠いた語形として現れる[32]。

許されず，［ta:k］，［tak:］，［takt］のどれかでなければならない。ちなみに，スウェーデン語では tak［ta:k］は「屋根」，tack［tak:］は「感謝」，takt［takt］は「拍子」の意味である。

[31] 北ゲルマン語では後舌母音の直前の w- は規則的に脱落した。

[32] この場合には，当該母音は語末音節にあって無アクセントなので，代償延長は相殺された。
西ゲルマン語でも，無アクセントの語末の -en は標準オランダ語の「語幹＋-en［ə(n)］」（vinden［'v̥ɪndə(n)］「見つける」）のように，発音しない傾向が強く，西フリジア語では完全に消失した（西フ fine［'finə］「同左」）。中部ドイツ語や南部の上部ドイツ語の諸方言では，無アクセントの -en において「n の消失」が後続音の種類とは無関係に広範に見られる。3.2.3.で言及したルクセンブルク語の「アイフェル規則」，Newton（1990：165-168）参照。
後述するゲルマン語の重要な革新のひとつである形容詞の弱変化語尾 -(e)n，さらには名詞の弱変化語尾 -(e)n も，現代ゲルマン諸語では完全には残っていないことが多い。
ド　die braun*en* Auge*n*「茶色の（braun＋形容詞弱変化語尾 -en）目（弱変化名詞，Auge＋複数形語尾 -n）」

4.5. 口蓋化の諸相 ──「ケントゥム語群」と「サタム語群」

さて，「舌，言語」を意味する前記の語の話題に戻ろう。最後に残った問題は，英語 tongue とフランス語 langue の -gue［g］とロシア語 jazyk の -z-［z］の対応である。これは閉鎖音の調音位置が口の奥寄りの軟口蓋から，硬口蓋や歯茎のような前寄りに変わる「口蓋化」（硬口蓋化 palatalization），それからさらに摩擦音（歯擦音 sibilant）や破擦音に変わる「擦音化」（assibilation）の結果である。ロシア語では規則的に k/c［k］が s［s］になり（ラ cent-um ↔ロ sto/-sot「百」），g［g］が z［z］になった（ラ(g)nō-scere↔ロ zna-t'「知っている」）。詳細は省くが，これに-k が加わっているのがロシア語の jazyk である。

この事実を再びゲルマン語の例に照らしてみよう。歴史的に北海ゲルマン語に属する英語やフリジア語では，ドイツ語やオランダ語とは異なり，古い時代に前舌母音の前後で k/c［k］，g［g］が口蓋化を起こした。前舌母音（i，e，ö/ø［ø(:)］，ü/y［y(:)］など）は舌の前面を緊張させ，高くして調音する母音であり，口蓋前方部を占める硬口蓋と調音位置が一致するので，硬口蓋母音ともいわれる。したがって，これは同化の一種である。次例で西フリジア語の lizze「横たわっている」や北フリジア語モーリング方言の säis「チーズ」は，擦音化によって摩擦音 z［z］，s［s］になっていることに注意されたい。

英　lie［laɪ］<古英 licgan（cg［dʒ］<［ɟ:］）「横たわっている」—yesterday ['jestəˌdeɪ]「昨日」—cheese［tʃi:z］「チーズ」

オ　de bruin*e* og*en*（bruin＋形容詞弱変化語尾 -e，oog＋名詞複数形語尾 -en）

西フ　de brún*e* eag*en*（brún＋形容詞弱変化語尾 -e，each＋名詞複数形語尾 -en）

ス　bruna ögonen「同上」（brun＋形容詞弱変化語尾 -a，名詞複数形 ögon（単数形 öga）＋定冠詞 -en）

ア　brúnu augun「同上」（brún-＋形容詞弱変化語尾 -u，名詞複数形 augu（単数形 auga）＋定冠詞 -n）

-n の消失は，ゲルマン祖語の長母音 ā，ē² ［e:］の起源を理解する上でも重要である。

西フ　lizze［ˈlɪzə, ˈleːzə］—juster［ˈjøstər］—tsiis［tsiːs］/北フ（モ）　säis［sɛis］
オ　liggen［ˈlɪɣə(n)］[33]—gisteren［ˈɣɪstərə(n)］—kaas［kaːs］
ド　liegen［ˈliːgŋ］—gestern［ˈgɛstɒn］—Käse［ˈkɛːzə］

ただし，軟口蓋閉鎖音が口蓋化しなかったドイツ語でも，後述する第二次子音推移（k［k］>ch［x］）の結果も含めて，比較的新しい時代に軟口蓋摩擦音 ch［x］（Bach［bax］「バッハ」の ch［x］「ハ」）が直前の前舌母音・子音に同化して，硬口蓋摩擦音 ch［ç］（ich［ɪç］「私」の ch［ç］「ヒ」）となった。この子音は西ゲルマン語としては，いかにもドイツ語的な響きがする[34]。

ド　acht［axt］「8」↔echt［ɛçt］「本物の」—Patriarch［patʁiˈaʁç］[35]「家長」—einig［ˈaɪnɪç］「唯一の」
オ　acht［ɑxt］—echt［ɛxt］—patriarch［pɑtriˈ(j)ɑrx］—enig［ˈeːnəx］
西フ　acht［axt］—echt［ɛxt］—patriarch［patriˈarx］—ienich［ˈiənəx］

北ゲルマン語でも，13 世紀半ば以降，語頭の k［k］，g［g］，sk［sk］は前舌母音の前で多様な口蓋化を引き起こした。「非口蓋化」（depalatalization）によって後の時代に相殺されたデンマーク語を除いて，アイスランド語では硬口蓋閉鎖音 k［cʰ］，g［ɟ］，sk［sɟ］，フェーロー語では歯茎破擦音 k［tʃ］，g［dʒ］と歯擦音 sk［ʃ］，ノルウェー語ブークモール（bokmål）では硬口蓋

[33] オランダ語には保たれている軟口蓋摩擦音［ɣ］は，ドイツ語では軟口蓋閉鎖音［g］に変化した。西フリジア語では，語頭音（goed［guət］「良い」）と語中の有アクセント音節の初頭音（augustus［ɔuˈgøstəs］「8 月」）で軟口蓋閉鎖音［g］に変化したが，その他の位置では軟口蓋摩擦音［ɣ］が保たれている。

[34] ベルギー北部フランドル地方を中心とする南部のオランダ語や，ドイツ語の影響を受けた今日の北フリジア語方言では，硬口蓋摩擦音 ch［ç］が観察される。オランダ語使用地域に隣接する西フリジア語には，この音はない。

[35] Patriarch［patʁiˈaʁç］<［patriˈarç］

摩擦音 k［ç］，g［j］と歯擦音 sk［ʃ］，スウェーデン語では舌の両端の平らの部分で発音する歯茎硬口蓋摩擦音 k［ɕ］（［ç］「ヒ」と［ʃ］「シュ」の中間），硬口蓋摩擦音 g［j］，舌背硬口蓋摩擦音 sk［ɧ］（［ç］「ヒ」と［x］「ハ」の中間，唇を丸める）のように，さまざまな発達をとげている[36]。

デ　kysse［ˈɡ̊øsə］「キスする」—gæst［ɡ̊ɛsd̥］「客」—skib［sɡ̊i(ː)ʔb̥］「船」
ア　kyssa［ˈcʰɪsːa］—gestur［ˈj̊ɛsd̥ʊr］—skip［sj̊ɪːb̥］
フェ　kyssa［ˈtʃɪsːa］—gestur［ˈdʒɛstʊr］—skip［ʃiːpʰ］
ブ　kysse［ˈçʏsːə］—gjest［jɛst］—skip［ʃiːp］
ス　kyssa［ˈɕʏsːa］—gäst［jɛst］—skepp［ɧɛpː］

口蓋化は数多くの言語に広く見られる一般的な現象である。日本語でも，「柿」の「キ」は子音部分が「カ」よりも前寄りで調音され，口蓋化を受けている。口蓋化はロシア語史あるいはスラブ語史でも，繰り返し重要な役割を果たした。

一方，jazyk における口蓋化は，条件がもはや特定できないほど古い時代に起こった[37]。これは印欧語族が分岐した初期の時代にさかのぼり，合計 12 の語派を歴史的に大きく二分する重要な基準とされている。「百」を意味する *km̥tóm を例に取り，k が口蓋化を経ていないおもに西方の語派をラテン語の centum に代表させて，「ケントゥム語群」（centum languages）という。他方，k が口蓋化を経たおもに東方の語派を次章で述べるイラン語派に属するアヴェスタ語の satəm に代表させて，「サタム（＝サテム）語群」（satem languages）と呼んでいる[38]。

---

[36] Haugen (1982: 65, 71, 74, 77, 83, 85), Haugen (1984: 339ff.), Bandle et al. (eds.) (2005: 1089, 1091, 1122f.) 参照。

[37] jazyk［jɪˈzɨk］の非円唇中舌狭母音 y［ɨ］（後寄りの［i］）は，後舌円唇狭母音 u の後代の非円唇化による。マルティネ（神山 訳 2003：146）参照。

[38] ケントゥム語群に属するのは，ゲルマン語派，イタリック語派，ケルト語派，ギリシャ語派，アナトリア語派，トカラ語派である。サタム語群には，スラブ語派，バルト語派，

4.6. 音韻対応の一般性 ── 言語類型論の貢献

以上のように，上記の一連の音韻対応は時空を隔てたゲルマン諸語にも広く見られる。つまり，ある程度の一般性を備えた自然な現象であり，信頼できる音韻対応を形成するといえるのである。これは歴史比較言語学においても，言語類型論の視点からのサポートが必要であることを示している。いくら比較方法を厳密に適応した結果であっても，得られた音韻対応が自然言語として類例の乏しい奇抜なものだとしたら，データ自体の信憑性を含めて再検討の必要性があることになる。本来，言語類型論は言語の歴史的親縁関係の探求とは別の分野ではあるが，歴史比較言語学にとって欠くことのできない論拠を提供することがある。近年，その重要性はますます強まっているといえよう[39]。

音声は自然言語で唯一，観察可能な実体である。いくら DNA 鑑定をしても，語形変化，語順，意味にかんする諸規則は何も出てこない。辞書や文法書の解説は，ブラックボックスの中身を外側から推察して得た抽象化の産物にすぎない。「ア」が「イ」に変化したなどということは，いかにも人生とは無関係に思える。しかし，あらゆる価値観から自由な音韻体系の変遷にこそ，私たちの祖先が日々，刻んできた言語の生長の歩みが克明に刻まれているのである。

5．印欧語族の親縁関係 ── duo と erku「2」の対応を例に

5.1. 印欧語族 ── その 12 の語派

ヨーロッパ以外にも，上記の一連の語派と同系の諸言語は数多い。まず，単独の言語で語派を形成するコーカサス地方の「アルメニア語派」（Ar-

---

アルバニア語派，アルメニア語派，イラン語派，インド語派が属する。

[39] その先鞭をつけたものに，プラーグ学派構造主義言語学の巨匠R. ヤーコブソン（RomanJakobson 1896〜1982）による有名な論文（1958）がある。ヤーコブソンはこの論文で，印欧祖語に/e/という 1 種類の母音しか認めず，閉鎖音系列の子音に無声帯気音/tʰ/を欠く/t/-/d-/dʰ/という 3 音素を仮定する考え方が類型論的に不自然で再考を要するとして，注意を促した。これは喉頭音理論，グリムの法則（子音推移），印欧祖語の原郷問題の研究に大きな刺激を与えた。ヤーコブソン（川本 監修共訳 1973：45–55）参照。

menian) がある。次に，「喉音」(ラリンガル，laryngeal) などのきわめて古い重要な特徴を唯一，残し，印欧語最古の紀元前 17 世紀半ばからの文献を伝えるヒッタイト語を含む小アジアの「アナトリア語派」(Anatolian，今日では死滅) が挙げられる。さらに，ペルシア語やゾロアスター教の聖典の言語であるアヴェスタ語で知られる「イラン語派」(Iranian)，仏教文典を通じて日本の文化にも大きな影響を与えたサンスクリット (Sanskrit) やインドのヒンディー語，パキスタンやインドのウルドゥー語，バングラデシュやインドで用いられるベンガル語，ネパール語，スリランカのシンハラ語などの現代諸語を含む「インド語派」(Indic) が加わる。そして，最後に，中央アジアという東方にありながら例外的にケントゥム語群に属し，A と B の 2 種類に分かれる「トカラ語派」(Tocharian，今日では死滅) がある。そして，以上の 12 の語派に分かれる諸言語は，前述のようにすべて「印欧語族」または「インド・ヨーロッパ語族」と総括され，紀元前第 5 千年紀半ば頃[40] に各語派への分岐を開始する以前は，きわめて同質性の強い言語共同体を成していたと推定されている。

インド語派とイラン語派だけはかつて「インド・イラン語派」(Indo-Iranian) というひとつのグループを構成していたといわれ，自らもともに「アーリア人」(Aryan) と称していた。今日の話者人口は，両語派で約 10 億人にも達する。他の語派については，バルト語派とスラブ語派の親近性とイタリック語派とケルト語派の部分的な類似性が指摘されているほかは，先史時代にもたがいに独立のグループだったと考えられている。考古学的には，印欧語族の祖先は周囲の異系統の言語の話し手を徐々に同化していった農耕定住型ではなく，牧畜を主体に馬車を使って長距離を移動し，急速に拡散する生活を営んだ人々であり，それがこれほど大規模な分布につながったとされている。今日，印欧語族は世界最大の語族であり，話者は約 25 億人以上を数え[41]，世界の総人口の半数余りを占めている。

---

[40] Watkins (1998：31)，Hoenigswald/Woodard/Clackson (2008：231) 参照。年代の確定には類書によって異同がある。

5.2. 数詞「2」を表す語 ── 現代印欧諸語の類似性

例として，石井・千野（編）(1999a,b) の用例にアルバニア語とゲルマン語のいくつかを補い，現存する 10 語派の代表的な現代語について，数詞の「2」を表す語形を列挙してみよう[42]。

① インド語派：ヒンディー語 do，ウルドゥー語 do，ベンガル語 duto，ネパール語 dui，シンハラ語 deka
② イラン語派：ペルシャ語 do
③ アルメニア語派：アルメニア語 erku
④ ギリシャ語派：現代ギリシャ語 dhio
⑤ アルバニア語派：アルバニア語 dy
⑥ バルト語派：リトアニア語 dù（男性）/dvì（女性）
⑦ ケルト語派：ウェールズ語 dau(男性)/dwy(女性)，ブルトン語 daou (男性)/div（女性）
⑧ スラブ語派：ロシア語 dva（男性・中性)/dve（女性)，ウクライナ語 dva（男性)/dvi（女性)，ポーランド語 dwa（男性・中性)/dwie（女性)，チェコ語 dva（男性)/dvě（女性・中性)，クロアチア語 dva（男性・中性)/dvije（女性)，マケドニア語 dva（男性)/dve（女性・中性)，ブルガリア語 dva（男性)/dve（女性・中性）；
⑨ イタリック語派(ロマンス諸語)：フランス語 deux，スペイン語 dos，カタロニア語 dos(男性)/dues(女性)，ポルトガル語 dois，イタリア語 due，ロマンシュ語 duos，ルーマニア語 doi (男性)/două (女性・中性)
⑩ ゲルマン語派：英語 two，オランダ語 twee，アフリカーンス語

[41] Clackson（2007：3）参照。印欧語比較文法については高津（1954)，マルティネ（神山訳 2003)，その方法論については高津 (1992)，吉田 (1996)，各語派の古語の分析例については吉田（2005）参照。

[42] 男性・女性・中性は文法的な「性」(gender）の区別を示す。格変化をする言語は主格形を示す。

twee，フリジア語群：西フ twa，北フ tou/twäär/taue/tou/tau/taw[43]，東フ twäin（男性）/two（女性・中性），ドイツ語 zwei，ルクセンブルク語 zwéin（男性）/zwou（女性）/zwee（中性），イディッシュ語 tsvey，スウェーデン語 två，ノルウェー語 to，デンマーク語 to，アイスランド語 tveir（男性）/tvær（女性）/tvö（中性），フェーロー語 tveir（男性）/tvær（女性）/tvey（中性）

これはすべて現代語の語形だが，印欧祖語の分裂から推定で 5 ～ 6 千年余りを隔てた今日でも，驚くほどたがいによく似ている典型的な例といえよう。ただし，語頭の子音に注目すると，大多数の言語の d- にたいして，ゲルマン語だけが t-/z-[ts]/ts- のように相違している。これは「第一次子音推移」（グリムの法則）の項で後述する。

5.3. ラテン語の duo とアルメニア語の erku ──「メイエの法則」

それにもまして異なるのは，アルメニア語の erku［jeɹˈku］「2」だろう。しかし，一見，まったく例外的なこの語形も，比較方法によって他の言語との音韻対応が明確に証明できる。フランス人の A.メイエ（泉井 訳 1977）[44] による有名なラテン語の duo「2」との比較を紹介しながら，解説してみよう。

まず，ラテン語の duo は印欧祖語の *dwō という推定形にさかのぼる。アルメニア語では dw の w［w］が規則的に唇軟口蓋音 g^w を経て g となり，歯茎音の d は同じく歯茎音の r に変わった（d>ð>r）。g は後述するゲルマン語の「第一次子音推移」と同様に，無声化して k となった（w>g>k）[45]。そも

[43] 北フリジア語は標準語を欠き，たがいに独立した 9 つの方言から成っている。ここに列挙したのはその代表的な語形であり，性の区別を省略して示す。実際には，大陸方言に属するモーリング方言（北フ Mooring）には twäär（男性）/tou（中性・女性）の区別がある。

[44] A. メイエ（泉井 訳 1977：18-22，60-63，199-201，Meillet 1954（1925）：4-7，31-32）参照。

[45] アルメニア語ははるか北西のゲルマン語と印欧祖語の閉鎖音系列の特殊な変化を共有し

そも w[w]は両唇と軟口蓋の狭めを伴う二重調音によるもので，最近の IPA の一覧表でも欄外に置かれている。この w［w］は軟口蓋音 g（＞k）に変化したアルメニア語にたいして，ラテン語では duo と同源の副詞 *dwis が両唇音の bis「再度」（英 twice）となり，*dwi-＞bi- と変化している。これはラテン語から英語に借用された bilingual「2 言語使用の」の bi-「2 つの，二重の」と同源である[46]。さらに，この対応は英語の cow「牝牛」が印欧祖語の *gʷōus にさかのぼり，ラテン語では両唇音を含む bōs，アルメニア語では軟口蓋音を含む kov となったこととも無縁ではない。ラテン語の bōs の対格形は bovem であり，フランス語では bœuf となって，食用の「牛肉」の意味に限定されて英語に beef として借用された。英語の cow と beef は一見，無関係に見えるが，前者はゲルマン語，後者はロマンス語の語形を示す同源の「二重語」（doublet）なのである[47]。

さて，アルメニア語では語頭の rk- が発音しにくいために，「語頭添加母音」（prothetic vowel）の e を添えた（rk が語中にあると，e は現れない）。こうして erku が導かれる。これはかつて，日本語で「ロシア」を「オロシヤ」といったことに似ている[48]。あるいは，ラテン語の spīritus「精神」（英 spirit）のような語頭の sp-（st-，sc-も同様）がかつてガリア（ガッリア）とイベリアのロマンス語では発音しにくく，イタリア語の spirito にたいして，フランス

ている。後出の「牝牛」を意味するアルメニア語 kov と英語の cow の語頭子音［k］を参照。印欧語各語派の音韻対応表は Watkins（2006⁴：2018 f.）参照。

[46] ギリシャ語では *dwis-＞dis，*dwi-＞*di- と変化した。したがって，ギリシャ語の di-「2 つの，二重の」はラテン語の bi-「同左」と同源である。英語の語形は twi-（twi-circle「2 重円」，twice，twin）だが，英語はラテン語の bi- を含む bilingual「2 言語使用の」と並んで，ギリシャ語の di- を含む diglossia「2 言語(変種)使用」も借用している。

[47] 印欧祖語の *kʷがケルト語派では軟口蓋音 k を含む「Q-ケルト語」（Q-Celtic，ゴイデル諸語（Goidelic）：アイルランド語，スコットランド・ゲール語；マン語など）と両唇音 p を含む「P-ケルト語」（P-Celtic，ブリトン諸語（Brittonic，Brythonic）：ウェールズ（カムリー）語，ブルトン（ブレイス）語；コーンウォール語など）に分かれた事実も参照。なお，ケルト語では本来の p の音は失われている。

[48] メイエ（泉井 訳 1977：20，200）参照。

語の esprit[ɛsˈpʁi]「エスプリ」やスペイン語の espíritu のように，sp- を es- と -p- の異なる音節に分けて解消したのとも同類である。アルメニア語の erku の e は［je］と発音されるようになり，アクセントは語幹にあたる第 2 音節に置かれる。以上が「メイエの法則」（フ　loi de Meillet）と呼ばれる *dw＞*(e)rk への音韻変化のあらましである[49]。

*-ō から発したラテン語の duo の -o はアルメニア語の erku の -u に対応するが，これは本来，単数（singular），複数（plural）と並ぶ「数（すう）」（number，文法範疇の場合には「かず」ではなく，「すう」と読む）の範疇で，一対のペアを示す「双数」（dual）の語尾である[50]。同様にラテン語の octō「 8 」（英 eight; octopus「タコ」）も *-ō を示すが，これは「 4 」の双数形を意味する[51]。つまり，親指以外の 4 本の指を両手で表して「 8 」（ 4 × 2 ）としたのである。日本語でも「よっつ」と「やっつ」，「みっつ」と「むっつ」という倍数では，語頭子音の y-，m- が共通している。これは系統関係とは別に，人間の身体表現として自然に理解できよう。ちなみに，英語の finger はゲルマン語に共通の「指」を意味する語形の一例だが，これは数詞の five「 5 」（ド fünf）と同源である[52]。この dw- と(e)rk- の対応例はほかにも規則的に認められ，信頼できる音韻対応とされている。

---

[49] 厳密には*dw-＞*dgʷ-＞ðgʷ-＞*rgʷ-＞*ergʷ-＞erk-という過程を経ている。Lamberterie（1994：148 f.）参照。

[50] ギリシャ語の dúo「 2 」も同様。「 3 」を意味するラテン語の trēs やギリシャ語の treîs は，複数形の語尾 -s（＜*-es）を示している。

[51] ギリシャ語の oktṓ「 8 」も同様。サンスクリットの例を含めた解説については上村・風間（2010：27 f.）参照。ゲルマン語の双数については後述する。

[52] 月齢で数えたかつての十二進法は，キリスト教の影響で 10 本の指を基準とした十進法に置き換えられた。そのなごりとして，英語の eleven「11」（ゴ ainlif）は「 1 （英 e-，ゴ ain-；英 one）＋余り（英 -leven，ゴ -lif；英 left）」，twelve「12」（ゴ twalif）は「 2 （英 twe-，ゴ twa-；英 two）＋余り（英 -lve，ゴ -lif；英 left）」，dozen「12」は「 2 （do-＜ラ duo）＋10（-zen＜ラ decem「10」）に由来する。古ノルド語の hundrað（英 hundred）は「120」，þúsund（英 thousand）は「1200」の意味を最も遅くまで保った。

6．歴史比較言語学の発達 ── ロマン主義の高揚とその後

6.1. 印欧語族の発見 ── 近代言語学の誕生

印欧語族の親縁関係がインドに赴任していたイギリス人の法務官・インド研究者 W. ジョウンズ（William Jones 1746〜94）によって最初に本格的に表明されたのは，1786 年のことである。これはヨーロッパの旧体制を打破して，自由の精神を覚醒することになったフランス革命のわずか 3 年前にあたる。それ以前にも，ヨーロッパ諸語の類似性は広く知られていた。数詞や「父，母」などの親族名称が英語（father, mother）とギリシャ語（patḗr, mḗtēr）やラテン語（pater, māter）で似ていることなどは，もちろんそれ以前の知識人たちにもわかっていた。しかし，どの社会でも同じ役割をもつ基礎語彙の語形的類似は，むしろ当然と思われていたのである。それが，大航海時代を迎えて世界各地の諸言語に接し，遠く南アジアの太古の聖典の言語であるサンスクリットがギリシャ語やラテン語，ケルト語，古代ペルシャ語，今日では死滅した東ゲルマン語を代表するゴート語と，動詞の語根や文法の形式が偶然とはいいがたい一致を示すことを知って，自然言語の形式を客観的考察の対象とすることに目覚めたのである。しかも，ジョウンズは文献以前の時代の当該の諸言語が「何らかの『共通の源』」（some ‘*common source*’）にさかのぼる可能性をすでに明言している。その発見の興奮は，当時のヨーロッパの知識人たちの心をどれほど激しく揺り動かしたことだろう。

この学説に強い関心を寄せたのは，当時の大国で政治・文化の中心だったイギリスやフランスの人々ではなかった。それはヨーロッパの辺境に置かれた北欧スカンジナヴィア，それにとりわけ，近代国家統一を成し遂げた強国の狭間にあって，中世以来の小国乱立の分裂状態にとどまり，後進国としての閉塞感を痛感していたドイツ語圏の言語学徒たちである。自分たちの地味な田舎言葉にすぎないゲルマン語が偉大なギリシャ・ラテンの古典文化の血筋に連なり，遠い未知のアジアの古代世界とその聖典の言語に通じるという教えは，現実の窮屈な政治的・社会的制約から自由な大きな精神的魅力に満ちていた。こうして開拓された「歴史比較言語学」（historical comparative linguistics）[53] は，理性と論理中心の 18 世紀啓蒙主義の時代から脱して，民族

固有の文化的価値とその歴史的根源を憧憬の念をもって追求する 19 世紀の「ロマン主義」(romanticism) の中で，100 年余りの歳月をかけて発展していった。初期には文法構造の類似性に関心が向けられたが，19 世紀後半からは精密な音韻対応の規則性，すなわちいわゆる音韻法則の究明に重点が移った。そして，ドイツ南東部の都市ライプツィヒ (Leipzig) を中心とする「青年文法学派」(neo-grammarians)によって「音韻法則に例外なし」というテーゼが提唱され，「例外」には合理的な説明を与えるという科学性を獲得して，近代言語学の誕生を告げる画期的な出来事となったのである[54]。

6.2. 語族，人種，源郷 ── 歴史比較言語学の「原罪」

その後，世界中でいくつもの語族の存在が次々に証明された。そして，文献以前の各語族の祖語の姿は，印欧語比較言語学で開発された比較方法の適用によってかなり解明が進んだ。しかし，それでも世界の諸言語はけっして共通の祖語にさかのぼることはない。言語学が教えるのはバベルの塔以後の姿であって，アダムとイヴの時代にははるかに遠く及ばないのである。

一般に「言語」という概念は，「民族」という概念と密接な関係にあると理解されている。ただし，精神的遺産や行動様式の共通性を包含する「民族」と自然人類学的レベルでの「人種」を峻別して捉えれば，「言語」の系統と「人種」の系統は，本来，まったく別の範疇に属する。英語を母語とするアメリ

[53] 伝統的にはたんに「比較言語学」(comparative linguistics) と呼んでいる。ここでいう「比較」とは，歴史言語学の視点から言語間の系統関係を問題にすることである。系統に関係なく任意の言語の構造を比べるのは「対照」である。日本語と英語の「比較言語学」というものは，本来，あり得ない。これは「対照言語学」(contrastive linguistics)であって，言語類型論の一分野として捉えられる。しかし，最近では生成文法を中心に，複数の任意の言語間の統語構造を問題にする「比較統語論」(comparative syntax) という分野を指す用語が用いられるようになった。この場合には「日英比較統語論」という名称も使われる。本稿では誤解を防ぐために，従来の「比較言語学」の代わりに「歴史比較言語学」という用語を用いる。

[54] 印欧語比較言語学の研究史については風間 (1978)，神山 (2006)，青年文法学派の方法論についてはその集大成としてパウル (福本 訳 1993) 参照。

カのオバマ大統領がアングロ・サクソン系ではないことは，いうまでもない。私たち日本人はモンゴロイド（黄色人種）に属している。大相撲でモンゴル出身の力士が流暢な日本語でインタヴューに応じているのを見ると，親しみやすい顔つきもあって，言葉もそれほど違わないのだろうと思いたくなる。しかし，日本語とモンゴル語の間には親縁関係がない。語頭に「ラ」行の子音が立たず，古くは日本語で「ロシア」を「オロシア」といい，モンゴル語でも「オロス」（oros）というなどといった類型論的特徴は，系統的分類に「探り」を入れたり，同系の諸言語の下位区分に役立つことはあっても，系統関係を証明する「決め手」とはなりがたい。じじつ，惜しくも早々に引退を表明した初代モンゴル人横綱朝青龍（あさしょうりゅう）の本名が「ドルゴルスレン・ダグワドルジ」，2代目横綱白鵬は「ムンフバト・ダヴァジャルガル」だと聞けば，予想もしなかった距離感を覚えて「これはかなわん」と思うだろう。言語の系統的きずなを断ち切られたモンゴル人力士たちは，異文化に溶け込む強い決意を胸に秘め，超人的な努力で修行に励んでいるにちがいない。つまりは心がけが違う。だから，あれほど強いのだろう。

おそらく日本語は，世界で最も数多くの言語と親縁関係が唱えられた例といえよう。その日本語が南インド特有の言語と同系かもしれないと聞くと，日本人の祖先は南インドからやって来たのではないかと想像したくなる。しかし，厳密にはこれには必然性がない。言語学はそこまで教えてくれない。印欧語比較言語学でも，その「源郷」（ド Urheimat）については，リトアニア出身の M. ギンブタス女史（Marija Gimbutas 1921〜94）が考古学の立場から提唱した，黒海からカスピ海の北側を中心とする「クルガン文化」（Kurgan culture 紀元前 5000〜2000 頃）などの有力な提案はあるものの，いまだに最終的な定説がない。それでも印欧語の同系性は揺るがないのである[55]。

[55]「クルガン」（kurgan）とはロシア語で「塚，古墳」の意味で，土をかぶせた半地下の墳墓を指す。クルガン文化の担い手たちはまず，紀元前 4500 年頃にヴォルガ川下流のステップ地帯からウクライナ，バルカン半島に拡大した。紀元前 4000〜3500 年頃にはハンガリーに達した。紀元前 3500〜3000 年頃には東は小アジア（アナトリア）から北イランに至り，西はドナウ川をさかのぼってバルト海沿岸とエルベ川に及んだ。そして，紀元

ドイツ語圏を中心とする歴史比較言語学が隆盛を迎えた 19 世紀の時代に，言語の系統と人種の系統が冷静に峻別して理解され続けていたかについては，疑問の余地がある。当時の言語学者は文学者，思想家，法学者などと密接に交わり，自身もまたそうした学問分野を究めていた。たとえば，ゲルマン語学に大きな貢献を残したドイツ人の J. グリム（Jacob Grimm 1785–1863）は，歴史法学の創始者 F. ザヴィニー（Friedrich Carl von Savigny 1779–1861）と親交があり，弟のヴィルヘルム（Wilhelm Grimm 1786–1859）とともにいわゆる『グリム童話集』や『ドイツ伝説集』などを編纂し，ほかにも膨大な文献学的業績を残している。今日の私たちには底知れない知的巨人と映るそうした先達の精緻をきわめた重厚な学術成果の蓄積は，言語と民族を一体とみなして国民国家（ド Nation）の理念を志向するドイツ・ロマン主義の精神的高揚の余波の中で，無意識のうちにしだいに拡大解釈されていった。やがて 20 世紀を迎えると，歴史比較言語学の成果は思想的に歪曲され，卍印を逆手に取ったハーケンクロイツに象徴されるように，政治的に悪用された。そして，近隣諸国を侵略し，民族的優位性を主張してユダヤ人やロマ（ジプシー）の人々を虐殺する大罪まで犯してしまったのは，やはりヨーロッパのゲルマン語の中心的話者であるドイツ語圏の人々だった。一方，極東でその忠実な盟友となったのは，系統的に孤立し，周辺国の言語と無謀な親縁関係を主張する学説まで立ち上げて，アジアの人々を苦しめ続けた日本の私たちである。

前 3000～2000 年頃にかけてエーゲ海，東地中海，北海沿岸とライン川流域を経て，ほとんど全ヨーロッパを覆ったとされている。風間（1993：102 ff.），マルティネ（神山 訳 2003：45–57），ヴァルテール（平野 訳 2006：25–31）参照。印欧語の源郷問題については風間（1993）参照。

参考文献

Bader, François (dir.). 1994. *Langues indo-européennes*. Paris. CNRS Editions.

Bandle, Oskar et al. (eds.). 2005. *The Nordic Languages. HSK 22. 2*. Berlin/New York. de Gruyter.

Clackson, James. 2007. *Indo-European Linguistics. An Introduction*. Cambridge et al. Cambridge University Press.

Duden 6. (2009[6]). *Das Aussprachewörterbuch*. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich. Dudenverlag.

Durrell, Martin. 1990. "Westphalian and Eastphalian". Russ (ed.). 1990: 59–90.

Fortson IV, Benjamin W. 2010[2] (2004). *Indo-European Language and Culture. An Introduction*. Chichester. Wiley-Blackwell.

Harbert, Wayne. 2007. *The Germanic Languages*. Cambridge. Cambridge University Press.

Haugen, Einar. 1982. *Scandinavian Language Structures*. Tübingen. Niemeyer.

Haugen, Einar (übers. Magnús Pétursson). 1984. *Die skandinavischen Sprachen. Eine Einführung in ihre Geschichte*. Hamburg. Buske.

Hoenigswald, Henry M./Roger D. Woodard/James P. T. Clackson. "Indo-European". Woodard (ed.). 2008: 230–246.

Howell, Robert/Paul Roberge/Joseph Salmons (eds.). (近刊). *The History of the Germanic Languages*. Cambridge. Cambridge University Press.

Jasanoff, Jay H. 1994. "Germanic (Le Germanique)". Bader (dir.). 1994: 251–280.

König, Ekkehard/Johan van der Auwera (eds.). 1994. *The Germanic Languages*. London/New York. Routledge.

König, Werner 1998[12] (1978). *dtv-Atlas Deutsche Sprache*. München. Deutscher Taschenbuch Verlag.

Krech, Eva-Maria et al. 2009. *Deutsches Aussprachewörterbuch*. Berlin/New York. De Gruyter.

Ladefoged, Peter. 2001. *Vowels and Consonants*. Malden, Mass./London. Blackwell.

Lamberterie, Charles de. 1994. "L'arménien". Bader (dir.). 1994: 137–163.

Lehmann, Winfred P. 1994. "Gothic". König/Van der Auwera (eds.). 1994: 19–37.

Newton, G. 1990. "Central Franconian". Russ (ed.). 1990: 136–209.

Ramat, Anna Giacalone/Paolo Ramat (eds.). 1998. *The Indo-European Languages*. London/New York. Routledge.

Ramat, Paolo. 1998. "The Germanic Languages". Ramat/Ramat (eds.). 1998: 380–414.

Ringe, Don. 2006. *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic*. Oxford. Oxford University Press.

Robinson, Orrin W. 1992. *Old English and its Closest Relatives. A Survey of the Earliest Germanic Languages*. London. Routledge.

Romaine, Suzanne. 1994. "Germanic Creoles". König/Van der Auwera (eds.). 1994: 566–603.

Russ, Charles V. J. (ed.). 1990. *The Dialects of Modern German*. London. Routledge.

Семенюк/Калыгин/Романова (ред.). 2000. *Языки мира. Германские языки. Кельтские языки*. Москва. Academia.

Speyer, Augustin. 2007. *Germanische Sprachen. Ein historischer Vergleich*. Göttingen. Vandenhoeck & Ruprecht.

Stephens, Janig. 1993. "Breton". Martin J Ball/James Fife (eds.). *The Celtic Languages*. London/New York. Routledge. 349–409.

Watkins, Calvert. 1969 (2006⁴). "Indo-European Roots"/"Table of Indo-European Sound Correspondences". *The American Heritage Illustrated Dictionary of the English Language*. Boston et al. Houghton Mifflin. 1505ff. (2016ff.).

Watkins, Calvert. 1998. "Proto-Indo-European: Comparison and Reconstruction". Ramat/Ramat (eds.). 1998: 25–73.

Watkins, Calvert (ed.). 2000² (1985). *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*. Boston. Houghton Mifflin.

Woodard, Roger D. (ed.). 2008. *The Ancient Languages of Europe*. Cambridge et al. Cambridge University Press.

石井米雄・千野栄一（編）1999a.『世界のことば 100 語辞典　ヨーロッパ編』三省堂.

石井米雄・千野栄一（編）1999b.『世界のことば 100 語辞典　アジア編』三省堂.

泉井久之助 1968.『ヨーロッパの言語』岩波書店.

ヴァルテール，アンリエット(平野和彦 訳)2006.『西欧言語の歴史』藤原書店.（Henriette Walter. 1994. *L'aventure des langues en oiccident. Leur origine, leur histoire, leur géographie*. Paris. Laffont.）

上村勝彦・風間喜代三 2010.『サンスクリット・その形と心』三省堂.

風間喜代三 1978.『言語学の誕生 ── 比較言語学小史』岩波書店.

風間喜代三 1993.『印欧語の故郷を探る』岩波書店.

神山孝夫 1995.『日欧比較音声学入門』鳳書房.

神山孝夫 2006.『印欧祖語の母音組織 ── 研究史要説と試論 ──』大学教育出版.

亀井　孝/河野六郎/千野栄一（編）1996.『言語学大辞典第 6 巻　術語編』三省堂.

亀井　孝/河野六郎/千野栄一(編)1998.『言語学大辞典セレクション　ヨーロッパの言語』

三省堂.
河崎　靖 2006.『ゲルマン語学への招待 ── ヨーロッパ言語文化史入門 ──』現代書館.
高津春繁 1954.『印欧語比較文法』岩波書店.
高津春繁 1992.『比較言語学入門』岩波書店.（1950『比較言語学』改題）
清水　誠 1992.「北フリジア語モーリング方言　(1). 文法 ── V. Tams Jörgensen: Kort spräkeliir foon dåt mooringer frasch 訳注 ──」『北海道大学文学部紀要 40-3（No. 74)』65-162.
ソシュール，フェルディナン・ド（小林英夫 訳 1972）(1928，1940).『一般言語学講義』岩波書店.（Ferdinand de Saussure. 1978 (1916). *Cours de linguistique générale*. Paris. Payot）
寺澤芳雄（編）1997.『英語語源辞典』研究社.
パウル，ヘルマン（福本喜ノ助 訳）1993 (1965).『言語史原理』講談社.（Hermann Paul. 1880. *Prinzipien der Sprachgeschichte*. Halle an der Saale. Niemeyer）
浜崎長寿 1976.『ゲルマン語の話』大学書林.
マルティネ，アンドレ（神山孝夫 訳）2003.『「印欧人」のことば誌』ひつじ書房.（André Martinet. 1994² (1986). *Des steppes aus océans. L'indo-européen et les《Indo-Européens》*. Paris. Payot）
メイエ，アントワヌ（泉井久之助 訳）1977.『史的言語学における比較の方法』みすず書房.（Antoine Meillet. 1954 (1925). *La méthode comparative en linguistique historique*. Paris. Librairie Ancienne Honoré Champion. (Oslo. Aaschehoug)）
ヤーコブソン，ロマーン 1958.「類型学とその比較言語学への貢献」(“Typological Studies and Their Contribution to Historical Comparative Linguistics” 1958)（川本茂雄 監修共訳）『一般言語学』みすず書房. 1973：45-55.
吉田和彦 1996.『言葉を復元する』三省堂.
吉田和彦 2005.『比較言語学の視点 ── テキストの読解と分析』大修館書店.